

常磐会短期大学 教授 しめだ しんいちろう 卜田 真一郎さん



人権保育専門講座8は3回の連続講座です。家庭支援推進保育士の方を中心に、専門性を高めたい保育関係者の方々を対象に開催しています。

この連続講座は、「共有」「交流」「発信」の視点を大事に進めています。

「共有」・・・ゲストスピーカーの話を聞いて、似たような子どもや地域の現状や課題を共有します。

共有することで、自分がモヤモヤしていたことが何であるのかはつきりしてきます。

「交流」・・・交流をとおして、他の保育士から「こんなことやっているよ」という実践などを聞き、自身のアイデアやイメージを豊かにしていきます。

「発信」・・・今後、保育士自身が現場でどのようなことに取り組んでいくのか、「自分にできる次の一歩」を考え、紙に書いて発信していきます。

連続講座の1回目となる今回はゲストスピーカーに、香芝市手をつなぐ育成会副会長の黒田美恵さんをお招きし、『地域でともに幸せに暮らしたい～知的・発達障がいの子どもの子育て～』というテーマでお話しいただき、46人の方の参加がありました。

『地域でともに幸せに暮らしたい』

～知的・発達障がいの子どもの子育て～

香芝市手をつなぐ育成会副会長・奈良県手をつなぐ育成会役員・看護師

くろだ みえ 黒田 美恵 さん



子育ての経験、親の気持ちを伝えることができたらと思ってお話をさせていただきます。

私の子どもは・・・

くろだ せいたろう 黒田 清太郎 (現在 高校2年生) といいます。

3歳～7歳 知的障がいを伴う自閉症 (療育手帳B)

8歳～ 高機能自閉症 (療育手帳外れる)

11歳～ 高機能自閉症 ADHD (精神保健手帳3級) と診断がありました。

清太郎は4歳の時に地域の幼稚園に入り、支援を受けて2年間過ごしました。小学校・中学校は地域の学校に通い、特別支援学級に在籍しました。現在、試験を受けて公立高校に通っています。高校は、特別支援学級や特別支援の先生はいませんが、中学校で支援を受けてきた子どもは、公立高校でも引き続き支援をしていく体制が奈良県においては昨年度から整えられました。奈良県は子どもの特性を見ていながらサポートする体制が整えられており、高校でも子どものことを丁寧に見ていただいています。

ここからは0歳から6歳の頃のお話をさせていただきます。

## 0歳～2歳

清太郎は、0カ月の時からあまり泣かず、8カ月になっても人見知りせず、母親が誰かも分かっていない様子がありました。1歳半ごろには少し母親のことが分かった様子でしたが、執着はありませんでした。2歳を過ぎてても口に石や葉っぱを入れていました。私が「清太郎」と声をかけると、口の中に物を入れることはいけないことだと分かっている様で、すぐに吐き出していました。

清太郎は人と目が合わず、同年齢の子どもとかかわろうとはしませんでした。単語は出ていましたが、オウム返し、数字・アルファベット・テレビのセリフ等、独り言を言っていました。くるくる回ったり、手をひらひら動かす常同運動がありました。お気に入りのものや遊びが見つかったら、その場を離れることはなく、ずっと遊んでいました。



## 3歳～診断を受けて

### 【ショック】

清太郎が知的障がいを伴う自閉症と診断を受けた時、あまり感情は湧かず「何なんだろう」と頭の中が空っぽになりました。診断を受けたその日、お姉ちゃんの幼稚園のお迎えの時も、普段は喋っていた保護者とも話をする気分にはなれませんでした。お姉ちゃんの担任の先生が「お姉ちゃんが今日こんな絵を描きましたよ」と喋りかけてくれた時、私は涙が滝のように流れ出しました。そして、清太郎の診断結果のことをお姉ちゃんの担任の先生に話をしていました。「これから清太郎が療育をしていくなかで、お姉ちゃんにも何らかの影響が出ることもあるかもしれません。お姉ちゃんのことをよろしく願います」ということを言った覚えがあります。

### 【否認】

「できるだけ早く療育をしたほうがいいです」と病院の先生から言われたのですが、私は何も考えられませんでした。人によっては診断を受けた時、「そんなはずはない」と強く表れることがあります。

### 【悲しみ・怒り→適応→悲しみ・怒り→適応→再起】

診断を受けてからの3日間は、家の中でずっと泣いていました。泣いて泣いて、涙が止まりませんでした。しかし、このままではいけない、子育ても家事もしなくてはいけないと思いました。しかし、すぐに受け入れることができたのではなく、悲しみに戻ることもありました。そこからまた、「このままではいけない」と思い、がんばりました。このようなことが繰り返されました。そして、「子どものために前を向かなくてははいけない」と思うようになりました。



診断を受けた時は、頭の中が空っぽになり何も考えられませんでした。支援してくれる周りの人、園の先生によって、清太郎と家族は支えられました。先生の支えや言葉がけによって、保護者だけで抱え込むことなく、安心でき、「人に頼ってもいいんだ」と思えるようになりました。

### 【療育開始】

3歳から香芝市社会福祉協議会デイサービス「ひまわり園」に週4回ほど療育で通園しました。清太郎は集団での生活が苦手なため、最初は建物に入ることができませんでした。園の先生が無理強いすることはよくないと、無理に部屋に入れようとはせず、出来ることから始めてくださいました。



清太郎は小学校5年生になって、ひまわり園のことを話してくれたことがあります。「僕ね、ひまわり園に行って本当に良かったよ。その頃は、頭がぼーっとして、何だかよく分かっていなかった。でも、先生たちが僕に色々なことを教えてくれて、少しずつ分かるようになっていった。もし、僕がひまわり園に通っていなかったら、今僕は何もできなかったかもしれない。ひまわり園でがんばって良かったよ」と言いました。

療育で「ペアレントトレーニング」に出会いました。そのトレーニングでは「親が変われば子どもが変わる」ということを学びました。「親が変われば子どもが変わる」という視点は、親だけではなく、保育士さんにも同様のことが言えるのではないかと思います。

### 【親の会へ入会】

診断を受けてすぐの頃に「親の会」に入会しました。その時の私は「誰か助けて」「同じような思いをもつ親御さんとつながりたい」という思いでした。親の会には、先輩のお母さん方がたくさんいらっしゃって、私を受け入れてくれました。先輩のお母さん方からは「今は動き回ったり寝そべったりして大変やけど、大きくなったら落ち着いてくるから大丈夫」など、声をかけてもらって安心したことを覚えています。親の会は、今でも心のよりどころになっています。

### 地域で暮らしたい

清太郎が4歳になる前、近所の家の敷地に入って庭石を散らかすようなことがありました。その家の方は、「そのような時、どうしたらいいですか」と私に相談がありました。私は、「この先、清太郎は人の車に傷をつけたり、壁に落書きをしたり、水を出しっぱなしにすることがあるかもしれない」と思いました。そして、これからのことを夫婦で考えました。

清太郎が家や施設にこもって、外の世界に触れることなく、ご近所に迷惑をかけないように育てるのではなく、『外に出て、ご近所に迷惑をかけたなら謝ろう。助けてもらったら感謝しよう。皆さんにたくさんたくさん『ありがとう』を伝えていこう』と決めました。



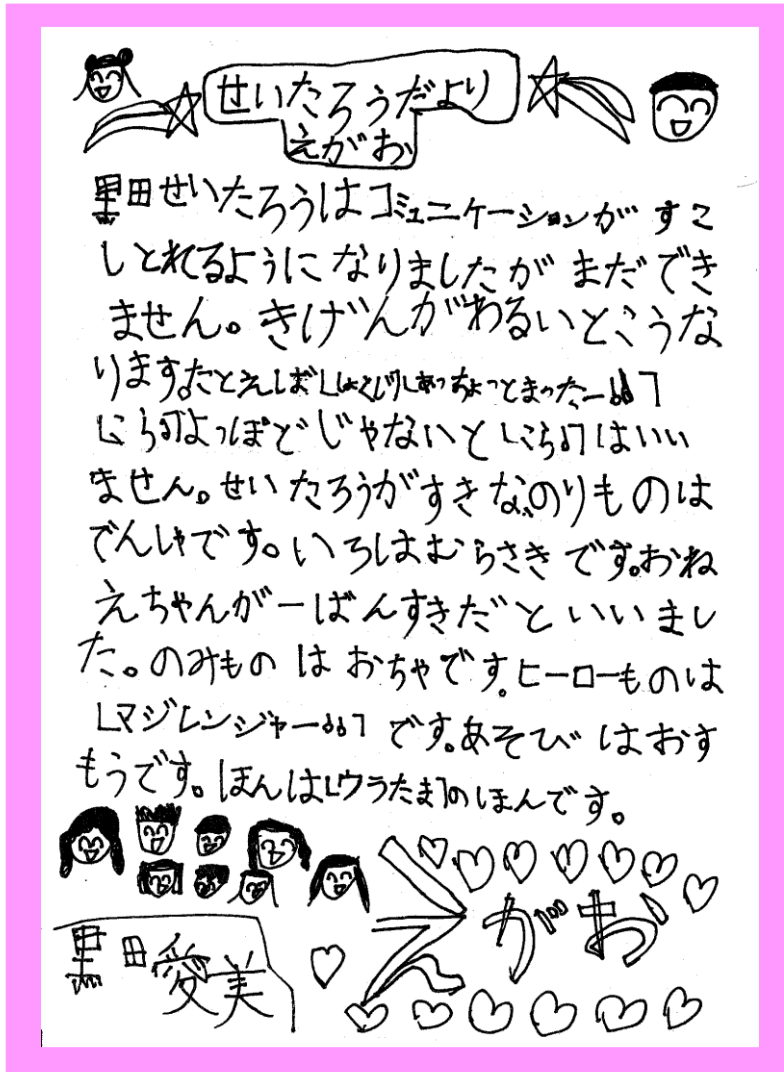
私たちは、清太郎が4歳の時に「清太郎便り」を用意して、地域の方に配りました。この便りの前半に清太郎の特性のことを書き、後半には「地域の中で暮らしていきたい」という願いを書きました。便りを書く時に気をつけたのは、子どもの良くないことばかりを書くのではなく、子どもの良いところも書くことです。そして、清太郎が悪いことをしたら静かに短い言葉で叱ってください。また、もしよいことをしたら、どうか褒めてやってくださいと書きました。

私は融通の利かない性格で、ルールを守れない人に対して「許せない」と思ったり、自分の考えが正しいと思ったりしていました。でも、清太郎が順番を守れず順番抜かしをしたり、道路の真ん中でひっくり返って大声で泣いていたりする時に、周りの人が「大丈夫だよ」「今日も元気だね」と言ってくれ、許してもらう度に私は感動させられました。私も、その人たちのように許せる人になりたい、心の優しい人になりたいと思いました。





「清太郎便り」のことを清太郎のお姉ちゃん（当時小学1年生）に話をすると、「私も書く」と言って書いてくれました。



清太郎は、みんな揃って「いただきます」をすることが苦手なこと、「『こらー』はよほどじゃないと言いません」や、清太郎が好きなものが書かれています。

「この便りを見せていい？」とお姉ちゃんに確認をして見せるようにしてきました。今日の人権保育専門講座についても「清太郎便り」を見せてもいいか確認してここに来ました。今、姉ちゃんは大学生になりました。お姉ちゃんも、今日ここに来たかったのですが、大学の講義があったので来ることができませんでした。「地域のなかで暮らしていきたい」という願いをもって、私たちは「清太郎便り」を出会った人に手渡していきました。



#### 【スイミングスクール入会】

全身運動をすることは子どもの発達に良いということだったので、清太郎が4歳の時にスイミングスクールに入会することにしました。お姉ちゃんがスイミングを習っていたので、行き慣れていましたが、実際に自分が泳ぐとなると話は別で、プールに入れず「わあー」と大声で泣き叫んでしまいました。そこで、プールサイドにビニールプールを用意して、そこへおもちゃを入れて入ることからスタートしてくれました。スイミングの先生は清太郎が「もう大丈夫」というところまで、少しずつ清太郎をプールに慣らしていってくれました。スイミングスクールの方針で「手をひっぱらない」というのがあって、無理強いをしないというのも清太郎には良かったと思います。

ある日、更衣室で清太郎が同じスイミングスクールの子ども2、3人に悪口を言われたり、叩かれたりしていることがありました。そして、スイミングのカバンが清太郎の手の届かないロッカーの上に置いてありました。子どもに話を聞くと、清太郎が独り言を言っていたり、歌を歌っていることがうさかったので叩いたとのことでした。ここは怒るのではなく、きちんとその子たちと話をすることが大事だと思いました。何かあった時には知ってもらえるチャンスだと思っています。「清太郎は独り言を言ったり、歌を歌ったりすることがあるの。そんなときに、何も言わず叩いても清太郎はどうして叩かれたのか分からないの。だから清太郎には口に出して伝えてね。言っても分からない時は、おとなの人に言ってね」と子どもたちに話をしました。その後事務の方が更衣時に見守りをしてくれ、見守りをやめた後もそのようなことはありませんでした。今も清太郎はスイミングを続けています。

#### 【地域のラジオ体操】

地域でおこなわれるラジオ体操に参加するようになりました。清太郎はラジオが好きで、民生委員の方が「清ちゃんラジオ好きだから、このスイッチ押してよ」と言ってもらって、4歳から小学校6年生までスイッチを

押す担当をさせてもらいました。このラジオ体操に清太郎を参加させたのは、先々の就労を見越して、朝の同じ時間に起きる習慣を身につけてほしかったからです。

ラジオ体操に参加されている地域の方は、清太郎のこと知ってもらっていて、「ラジオ体操のぼく」というふうに、町で出会うと声をかけてもらいます。そして、「ラジオ体操がんばっているね」と声をかけてもらい、清太郎も親も嬉しく思いました。

### 【私たちが積極的に地域のなかへ】

清太郎が地域で暮していくにあたって、お願いしていくことが色々あります。地域の方をお願いするのであれば、「私たち親が率先して地域の役員などを引き受けてやっていこう。地域の活動に積極的に参加していこう」と地域に出ていきました。清太郎もその地域の行事と一緒に参加しました。

私は子ども会の役員を7年間させてもらいました。そのなかで2年間は、会長をさせてもらいました。関連団体の会議がある時には、清太郎を連れて行き、清太郎のことを知ってもらえて良かったなと思います。



町で地域の方に出会うと、「こんにちは」と声をかけてくれたり、清太郎がルールを守れないことがあった時には、優しくおしえてくださったりします。周りの人の視線や声掛けが冷たいと清太郎は心が固くなっていったと思いますが、地域の方の声掛けやあたたかいかわりがあったので、清太郎も私たちも心をゆったりもって生活することができました。あたたかい地域のなかで、清太郎は育ててもらいました。

### 【地域の幼稚園で】

(入園式にて)

入園式は涙の入園式になりました。事前に会場を見せてもらい、「この席に座るよ」と座る席も確認しました。多くの方が居るところに入っていきるのが苦手な清太郎だったので、一番初めに会場に入らせてもらって、そこへ参列する人に入ってもらうようにしてもらいました。でも、かしまった服装で人が入ってくるので、清太郎は顔がこわばってしまい、不安の限界に達してしまいました。そこで抱っこして、会場の外に出て気持ちを落ち着かせましたが、その後、式場に入ることはできませんでした。事前に清太郎と入園式の準備を重ねてきたので、私は「大丈夫だろう」と思って当日を迎えました。でも、思いもよらず入園式に参加することができなくて、私は涙が止まりませんでした。

(プチトマト事件)

幼稚園でプチトマトの苗を植えました。清太郎は、友だちの苗におしっこをかけてしまいました。清太郎は、水をあげている感覚だったと思います。先生は清太郎に「絶対しないように約束させました」と私に話をしてくれました。でも、「約束してもまたしてしまう」と思いました。もし、同じようなことを清太郎がすると「約束をやぶった悪い子や」となってしまいます。「そんな時は、『清ちゃんは悪気があったんじゃないんだよ。またしてしまったら先生に言ってね』というようなかわりをしてもらいたかったです」と先生に伝えました。

清太郎は「これしないでね」と言われても忘れてしまうそうです。「約束」は大事なことだけど、子どもに伝えるときにどういう言い方や伝え方をすれば、子どもが納得できるのか、考えてもらえたら嬉しいです。



(「負けても大丈夫」「失敗しても大丈夫」)

清太郎は勝ち負けにこだわるのがあって、ジャンケンで負けるのを嫌がりました。負けるのが嫌で、ジャンケンをすることを自体を嫌がってしまい、手を後ろに隠すようになりました。先生が「負けても大丈夫」というような声掛けやかかわりをしてもらったおかげで、卒園する頃にはジャンケンで負けてもひっくり返って泣くことは無くなりました。



「負けても大丈夫」「失敗しても大丈夫」というような気持ちを子どもにもたせることができるように、子どもに経験を積ませること、そして子どもに対しての先生の声かけやかかわり方が大事だなと思いました。

(運動会にて)

初めての運動会の時のことです。全園児で入場する時、清太郎は私を見つけるとしがみついて離れませんでした。入場の時間が迫っていました。すると、先生が「お母さんも一緒に入場してください」と言ってくれました。全然参加できないというより、一緒に楽しく参加できたのでそれも良かったなと思います。1年経つと、清太郎は私がそばにいないでも一人で運動会に出ることができるようになりました。

## 清太郎の良き理解者に

子どもたちは、先生の清太郎へのかかわりをまねしてくれました。先生の清太郎へのかかわりを見ていた子どもたちからは「清ちゃんだけ〇〇してずるい」などの声上がることはありませんでした。子どもたちは、「これは清ちゃんだから必要なんだ」ということを普段のかかわりを通して分かっていました。幼稚園の時間だけではなく、降園後にも「一緒に遊ぼう」と声をかけてくれて、家を行き来して遊ぶことができました。

幼稚園の保護者の方は清太郎の良き理解者になってくれました。「清太郎便り」を読んでくださった保護者の方は、向こうから話しかけてくださってサポートしてくれました。小学校、中学校になっても周りの保護者の方の支えがあって、清太郎は生活することができました。そして、幼稚園のときの清太郎のことを知ってくれている友だちが、小学校、中学校に上がってからもよき理解者になってくれました。



## 【まとめ】

地域で過ごすなかで、清太郎の困ったところだけでなく、清太郎の良いところや得意なことを分かってもらえたことが嬉しかったです。子どもたちは、一緒に生活するなかで自分と一緒にいるところを探したり、一緒になって笑い転げることが嬉しかったりします。そして得意なことを知ってもらえることで、困ったところが強調されず、「そんなところもあるよね」と、あたたかく見てもらえます。できなかったことができるようになると、一緒に喜んでくれました。

小学校4年生の時、清太郎のクラスの子が「清ちゃんのいいところは、人を優しくするところです」と書いてくれたことがありました。私は、子どもに「優しい人になってほしい」と思っていたので、その手紙がすごく嬉しかったです。助けてもらうだけではなく、お互いに良い刺激を与え合っていると感じています。清太郎は、「毎日が楽しい」と言って高校に通っています。清太郎は、今後、心理学を学んで、同じような発達悩みを抱えている人の支援をしていきたいと考えています。

0～6歳の時期は、人間の人格形成ができる時です。いろいろな子どもとかかわっていくと思いますが、子どもと接していて困ったり悩んだりすることもあると思います。そんな時に、「困った子」として見るのではなく、「その子自身が困っている」という視点でたずさわってほしいなと思います。その子もっている困り感を一つ一つ取り除いていくことで、その子の夢や可能性が広がっていくと思います。



テニスの錦織圭選手が、『「この命、どう使う』という言葉が僕は気に入っているんです』と、テレビで言っていました。生まれてきた命は、いろいろな使い道があります。障がいをもって生まれてきた子は、ずっと助けられて支えられて生きていくのではなく、人を支え、人の心を輝かせる力があると思います。先生方には、一人ひとりの命を輝かせていってもらえるように子どもたちにかかわってほしいなと思います。



## ト田さんから 黒田さんへの質問

Q 親の会の取組をするなかで、保護者のなかには「地域の方に知ってもらいたい」という保護者もいれば、「隠していたい」という保護者もいるかと思えます。どのように親どうしが支え合っていますか？



A 親の会は高齢化し、入会の保護者の方は少なくなっています。私たちは、地域の方が参加できる研修会や保護者懇談会などを企画しており、そこには若い保護者の方の参加があります。保護者のなかには、子どものことを人に言えない、外に出せないという方もいます。お父さんやおじいちゃん、おばあちゃんの理解が得られないと悩んでいるお母さん方がいます。

保護者の方のなかには、自分の気持ちを出せる場がない方がいます。だから、研修会や保護者懇談会で悩みを話された方は「話をして気が楽になった」とすっきりした表情で帰られます。子どもの障がいを受け入れることができている保護者の方にあれこれ勧めるのはよくないので、いろいろな事例や情報を伝えることをしています。その人その人のタイミングがあると思います。無理に気持ちを話してもらおうのではなく、周りで支えながら話したくなるタイミングを待つようにしています。またレクリエーション活動をとおして、コミュニケーションを図って、話す機会をつくったりしています。

## 障がい児共生保育の在り方を考える

その子に対して支援をどうするかというだけではなく、いろいろな子どもがいるなかで、みんなが生きやすいクラスをどうつくっていくのかが大事だと思います。

今日は、障がい児共生保育という視点で、現場の先生が直面している課題を出し合って共有し、「自分の園ではこんな取組をしているよ」とアイデア等を出し合っていたらと思います。



## ト田先生より

地域のなかでどういう居場所をつくっていくのかが大事だと思います。安心して子どものことが言える、子どもも安心して過ごせる居場所になっているかどうか。障がいがある子どもが生活していくうえで、安心して生活できる場所が見つからないことがあります。それは社会全体にゆるやかさがなく、居場所感がなくなっているからなんです。ゆるやかさをもっている社会はみんなが生きやすい社会なんですよ。ゆるやかさをもった社会に変わっていくために、保育現場ではどのようなことができるか考えていくことが必要です。保護者の話を聞いたり、支えたりする視点を黒田さんからいただきました。

## 参加者より

○地域の中で暮らしていくことで、お互いに刺激や影響を与え合うことができました。温かい視線の中では心はやわらかくなり、そのような温かい社会は「すべての人の生きやすさ」につながると感じました。

○現在、担任している子どもの姿と重なるところが多くありました。その子の個性を広げていけるかわりをしていきたいと思えます。

○今年度、園内研修で「子どもの将来を見据えて」をテーマに人権について考え合っています。そこに「『地域で幸せに』という視点が抜けてしまっていたんじゃないか」と考え直す機会をいただけたように思います。「幸せってなんだろう、どういうことだろう・・・」と。自身をふり返り、問い直していきたいと思えます。

